

線状降水帯予測精度向上ワーキンググループ第 7 回会合 議事概要

1. 開催日時

令和 5 年 12 月 19 日（火）13 時 15 分～15 時 15 分

2. 開催場所

気象庁 7 階会議室 1（ウェブ会議併用）

3. 出席者

別紙のとおり

4. 議題及び検討結果の概要

下記の議題について検討を行った。

○ 線状降水帯の予測精度向上に向けた取組の進捗状況について

- 令和 7 年度末の局地モデル（LFM）の高解像度（1km）化に向け、開発効率も考えつつ、今後様々な検証を行いながら開発を進めるとともに、半日前予測や令和 8 年に開始予定の 2～3 時間前予測への活用といった観点を含め精度検証を進めて欲しい。並行して、高解像度の予測値の効果的な利活用に関する調査・検討も進めると良い。
- 線状降水帯の予測精度向上に向けて、水蒸気の流入を正確に捉えることは重要である。これまでに導入した水蒸気観測の線状降水帯予測に対する影響評価を進めつつ、新規観測の導入（例：航空機による機動観測）についても検討してもらいたい。

○ 線状降水帯の予測精度向上に向けた学官連携の方策について

- 機構解明研究で得られた線状降水帯のメカニズムに係る知見を、今次会合で示されたような表形式でまとめる取組は非常に重要である。機構解明研究会等での議論や数値予報資料共有 Web のフォーラム等を活用した知見の共有など、学官連携の取組として知見の集約が進められると良い。
- 集中観測においては、大学や研究機関の有する観測手法に係る知見や経験、過去の観測プロジェクト等を参考に進めることが、より高品質な観測データの収集、及びそれを使用した機構解明研究にとって有益である。また得られた観測デー

タを活用し、予測精度向上に資するようなデータ同化研究や数値予報モデルの検証等を進めていくと良い。

- スーパーコンピュータ「富岳」を用いた共同研究をより良いものにするためには共同研究先との対話が重要であり、得られた経験を今後の学官連携の取組の検討に活かせると良い。また様々な学官連携手段の一つであるモデル貸与についても、互いの成果を持ち寄って議論できる場を設けるなど、学官での相互コミュニケーションを促進する取組について検討いただきたい。

以上

線状降水帯予測精度向上ワーキンググループ第7回会合 出席者

線状降水帯予測精度向上ワーキンググループ 委員（外部有識者）

○	佐藤 正樹	東京大学大気海洋研究所海洋地球システム研究系 教授
	伊藤 耕介	京都大学防災研究所気象・水象災害研究部門 准教授
	伊藤 純至	東北大学理学研究科地球物理学専攻 准教授
	川村 隆一	九州大学理学研究院地球惑星科学部門 教授
	清水 慎吾	防災科学技術研究所 主任研究員
	高薮 縁	東京大学大気海洋研究所気候システム研究系 教授
	竹見 哲也	京都大学防災研究所気象・水象災害研究部門 教授
	坪木 和久	名古屋大学宇宙地球環境研究所 教授
	芳村 圭	東京大学生産技術研究所 教授

(○：主査、敬称略、主査以外は五十音順)

気象庁出席者

安田 珠幾	総務部参事官（技術）
石田 純一	情報基盤部数値予報課長
濱田 修	情報基盤部気象衛星課長
杉本 悟史	大気海洋部予報課長
中三川 浩	大気海洋部気候情報課長
永戸 久喜	気象研究所研究連携戦略官